

ニテ晴久ヲ亡サン事ハ、中々難キコトニテゾ有ント被申ケレバ、隆通否トヨ左ニ非、忠興ノ比喻似タルコトハ似タレ共、是ナルコトハ不是、今諸國十二諸侯七雄ノ如クニ分レテ、奕棋ノ如クニ亂レタリ、○下略

〔とはすがたり〕碁をかこむものに目なし、かたはらにみるもの目ありといふ、たがはぬたとへなり、然るにこれはをのれに求むる心うすくて、人をせむる心のあつきが上にやあるらん、弓ゐるもの、をのれにかへす心にはおとりたり、ある人碁をかこみたるに、いしをおろし、またあげてこゝにやをかんかしこにやおろさんと、かたはらなる上手にとふに、さればしかもありなん、かくもありなん、まどはしとこたふ、いなのためへ、學びがてらにせんといへば、さりとて盤にむかはぬものを、わき目にはゑこそわかたねといふ、この人は弓ゐるもの、たぐひなるべし。

〔可笑記〕むかし、さる人のもとに、人々寄合碁をうてり、その中にもすぐれて碁ずきなるといふ人のふせいを見聞こそおかしけれ、かの人、ごにさへうちか、れば、萬の用所を正ただとかき、こうくわいする事かぎりなし、何ぞ物をみすれば、當座はたしかに見たると云て、後にとへば、何でもみぬと云あらそひ、又のみ食物をあたふれども、はら十分にのみくふて、後にとへば、其味の五味を去らず、或はかしらの上に火をつけ水をながせども、夢にもわきまへ去らず、たゞ碁にわるくすきて、なぐさみと云事を覺えずげにもく、聖人の詞に、心こゝにあらざれば、きけどもきかず、みれどもみず、食すれどもあじはひを去らずと、此外此心持、萬事に心得らるべし。

〔翁草 百九十〕塵墳の知里

碁打に馳走するは無益也、それも深く耽らぬ人はいかゝあらむ、我如き好士は碁にかゝりては、哺を忘れ、萬の事を放解饜するも邪魔に成ゆへに、あるじの心をこめて饜するもはやくたうべ、不興顔にそこく、に挨拶して、はやたうべ仕廻ひて盤に向はん事を思ふ、ある好士、此情を自ら